

ロコモとフレイル（認知度を上げるために）

石野 洋（SLOC 総務委員会）

私は基本的にカタカナ言葉は嫌いだ。特に日本語に入ってくるカタカナ言葉は、元の言葉から一部の音を切り取った表現となっており、原語の省略形でもなく、原義を離れて使われることが多い。各人が個々の解釈で理解しており、その言葉の共通点が希薄な感じがしている。

そのカタカナ言葉である、「ロコモ」と「フレイル」、一般の人は何のこっちゃと感ずるのは当たり前でしょう。なかなか認知度が上がらない中、協同でアピールすることで間口と裾野を広げていくのはどうでしょうか。

当初、ロコモがフレイルに取り込まれて影が薄くなってしまふのではと私は危惧しましたが、フレイルの中では、精神心理的要因として「認知症」、社会的要因として「地域参加への希薄化」、身体的要因として「ロコモ・サルコペニア」が取り上げられています。

ロコモの認知度向上が頭打ちとなっているジレンマの中では、フレイルの中での存在感を強調することで、老年医学の側面からの援護射撃を期待するのはどうかと思うようになってきています。

認知症は、内科の中でも神経内科、精神科が特化して対応しており、社会的要因については地域包括システムが強力に宣伝している。ロコモには、内科の先生が介入しようとされてはいますが、運動器の専門知識に乏しくなかなか踏み込めない。ここは整形外科医の独壇場とならざるを得ないのではないのでしょうか。